

説明事項リスト					
No	コメント受領日	資料番号	コメント内容	説明内容	反映する資料名
1	2020/12/2	DRY-1-6 P.203	「貯蔵エリアにおける線量評価では乾式キャスクの配置を考慮し40基の乾式キャスクを考慮する。」とあるが、P.226第5-1表⑧では相互遮蔽効果は未考慮と記載されている。 空気で構成された円筒形状の線源を40か所に設置したという意味か。	ガンマ線の直接線評価では、相互遮蔽効果を見逃すために物性を空気とする円筒形状の中空線源としてモデル化しています。	—
2	2020/12/2	DRY-1-6 P.204	DORTコードによる中性子線量評価でのルジャンドル展開近似次数、角度分点数、スカイライン計算でのレイエフェクト回避の方法を説明すること。	ルジャンドル展開次数は□角度分点は□です。レイエフェクトの回避には初回衝突線源法(First collision source method)を用いています。	—
3	2020/12/2	DRY-1-6 P.212	コード概要欄3行目の「DORTコードの後継コードである。」の記載は、「DOTコードの後継コードである。」の間違いではないか。	記載の間違いのため、資料を修正します。	DRY-1-6
4	2020/12/2	DRY-1-6 P.215	放射線審議会の基本部会“外部被ばく及び内部被ばくの評価法に係る技術的指針(平成11年4月)”では、事業者が当該施設での放射線業務従事者及び公衆への入射条件の違いを正確に把握することが困難であると考えられることから、安全側の評価値となるAP照射条件での実効線量への換算係数を採用することが適切であると述べられているが、中性子実効線量換算係数にROTジオメトリを採用した理由は何か。	ROTジオメトリは単一線源の放射線場の中でランダムに動く人のジオメトリ近似としても適用可能とされており、敷地等境界の一般公衆において、1年間線源の方向を常に向き続けることは現実的に考えられないため、設定は妥当と考えています。 なお、放射線審議会の指針では、なお書きで「事業者が、当該施設の利用状況を加味した適切な入射条件を設定することが可能な場合には、この条件(あるいは、これらの条件の組み合わせ)を採用することができる」とされており、 従前までは敷地等境界のガンマ線量は空気カーマで評価しております。今回、敷地等境界の線量を実効線量に見直す際、既設建屋の線量は空気カーマから実効線量への換算係数を、評価値の連続性(数値が変わらない)及び審査ガイドに従い1Sv/Gyとしています。1Sv/Gyは事故時の被ばく評価にも適用されている換算係数と同じであり、ROTジオメトリを包絡しております。したがって、今回の評価でも他施設の換算との整合性を考慮して、ガンマ線の実効線量は1Sv/Gy、中性子の換算係数はROTとISOのうち保守側であるROTジオメトリとしています。	—
5	2020/12/2	DRY-1-6 P.221	第4-3表の「(参考)深層透過の減衰率」はMCNPによる解析の結果か。	ANISNコードの結果であり、P.214に記載している包絡スペクトルのコンクリート中での実効線量の減衰率を記載しております。	—
6	2020/12/2	DRY-1-6 P.220	粒子輸送計算が適切に実施されるためのウェイト・ウィンドウの設定の妥当性を判断するためには、輸送粒子(線量率)の空間分布だけでなく、誤差の空間分布や、ヒストリーに対する評価値や誤差の変化・収束状況等を多角的に確認することで信頼性が向上すると考えられる。 第4-2図以外に確認した事項はあるか。	モンテカルロ法を採用しており、簡易的な評価であることから、確認した項目としては統計誤差と第4-2図の分布図のみとなります。	—
7	2020/12/2	DRY-1-6 P.226	地形を考慮すると、実際には直接線は土壤に遮られて到達しない(無視できる)との判断か。	玄海の乾式貯蔵施設は半地下構造となっていることから、実際には直接線は土壤に遮られて到達しないと考えております。 ただし、今後、地形が変わる可能性も考慮して、線量評価では土壤による遮蔽を考慮しないこととしております。 また、既設建屋からの線量に対して乾式貯蔵施設からの線量は十分低く、合計線量への寄与が小さいことから現行の評価で問題ないと考えております。	—

□:機密に係る事項であるため、公開できません。